

女相撲（高玉サーカス）と映画

村山 正市

女相撲は、これまで隠された歴史として、地元ではあまり研究されてこなかった。ラジオ「小沢昭一的こころ」の小沢昭一氏が山形県に取材に来られ『私のための芸能野史』で取り上げている。その後、平成 16 年に遠藤泰夫氏が、母親のことを『女大関 若緑』として朝日新聞社から出版されたことで、表に女相撲の歴史が浮かびあがる。民俗学者の亀井好恵氏が平成 24 年に『女相撲民俗誌 越境する芸能』を出版して、女相撲興行について注目と反響を呼んだ。YBC でも取り上げられ 3 回にわたり放送された。亀井好恵さんは、何度も山形を訪れ、清池八幡神社や地元研究者である佐藤宏一さんに伺い取材をされた。亀井さんと私は同年代であり、女相撲最期の太夫三浦さんとお会いした 1 人が私であり、交流が続いている。

平成 3 年に脚本家早坂暁氏が TBS『女相撲』で第 18 回放送文化基金賞本賞を受賞された。四国に女相撲興行が海外巡業の実力があるのに解散することになったというドラマである。西田敏行さん、木の実ナナさん、沢田亜矢子さんなども俳優陣で構成された。早坂氏は平成 29 年にお亡くなりになった。女相撲の映画は、平成 30 年 7 月に上映された瀬々敬久監督の「菊とギロチン」が、山形ムービーオンで上映され観賞した。その際に、7 月 4 日に女相撲発祥の地で、女相撲絵馬が奉納されている清池八幡神社へ監督と女優木竜麻生が参拝に訪れた。映画では「石山女相撲」が「岩玉女相撲」と紹介され、大正末期、関東大震災の後に日本の様子が描かれ、東京近郊に女相撲一座がやってくるストーリーであった。

それ以前に、高玉サーカスとして映画に登場してくる。昭和 22 年松竹映画、マキノ正博監督の「淑女とサーカス」に「高玉・木下サーカス」として登場する。昭和 24 年には安田公義監督の「最後に笑う男」の映画では、廃業寸前のサーカス一座として花形空中ブランコに「東洋サーカス」として「高玉サーカス」が登場してくる。映画の中で「TAKATAMA」という言う文字が出てきている。山岡淳一郎氏が『木下サーカス四代記一年間 120 万人を魅了する百年企業の光芒』で紹介している。

高玉サーカスは、大日本神農会相談役高玉組本間一族が、女相撲の後に始めたものである。明治時代には女相撲興行であったが、昭和に入りサーカスへ転換している。初代が女相撲絵馬の奉納者の 1 人で、清池骨堂祭礼などを仕切った、本間半三郎氏である。2 代目は東北一の興行勢力を持ち、昭和 2 年北海道で揉め事の仲裁に入り死去した本間勘十郎氏である。3 代目は大日本神農会相談役の本間勘太郎、本